

ICA事務総長ケスケメティ博士のアーキビストと文書館Q&A

—日本に来ての印象は、いかがですか。

ケスケメティ（以下、ケ）日本は特別だっていう考え方があるような気がして、これに当惑を感じます。文書館のことだったら、ヨーロッパの経験から学べるところは多いんじゃないでしょうか。まァ、「自分は特別」式の考え方はアメリカにもないとは言えませんがね。

—アメリカではアーキビスト協会が中心となって、公認アーキビスト(Certified Archivist)という資格制度を作ったそうですね。

ケ そのとおりです。だが、アーキビストとかライブラリアンとかいった資格を、カネと数の力で作り上げてアメリカ風を押し通すという感じがして、ちょっと…。例えばカナダではもっと無理なく、うまくやっていますよ。極言かもしませんが、文書館の世界では、「国粹主義」

は邪魔になるだけだっていうことかな。

—じゃあ、少しヨーロッパのことも教えて下さい。

ケ イギリスでは、中央文書館であるPROが19世紀に設立されました。ここの資料は公的なものに限定されています。地方の文書館は別に運営されており、特別な調整をしてはいません。法律はありませんが、ネットワークが形成されています。アーキビスト協会では、資格付与をはじめましたが、いろいろと苦労している様子です。

—大陸各国では、どんな具合でしょうか。

ケ 文書館を渡るといふ形の異動があるのは、イタリア、フランス、オランダ、ドイツあたりに共通したことがらです。アーキビストという専門家がA館からB館へと異動するわけです。

I C Aの会計担当でドイツ連邦文書館にいたオルデンハーゲさん、彼は統一後ポツダムの文書館に異動しました。だからI C Aの会計も彼と共に動きましたよ。

この異動の問題点は、ひとつの文書館で働く期間がどれ位かということです。短かすぎても長すぎても具合が悪い。もしかすると、異動というヤツは、ない方が良くかもしれません。

——アーキビスト学校のことはどうでしょう。

ケアーキビスト学校が出来たからといって、異動その他の人事問題の解決につながるものでは断じてありません。学校では、どうヒトを育てるかということが主眼点です。卒業生が多過

ぎると(就職先との関連で)良くありません。

——最後に、日本にアーキビスト学校を作るとしたら、どんなことが考えられると思われますか。

ケ 私は一昨日日本に着いたばかり、しかも初来日です。それに日本語もできないからコメントはしにくいのですが、例えば国立公文書館がアーキビスト学校を作れば、それは国立公文書館自身のために有効かとも思います。

——ありがとうございました。

本稿は去る5月18日、東京から京都へ向かう新幹線車中での雑談のメモをもとに構成したものです。 文責・小川千代子(国立公文書館)